

香港の危機的状況は 歴史に残された 欧州帝国主義の爪痕

在仏コラムニスト 安部 雅延



香港国安法は中国の戦略なのか

中国中央政府が香港に対して国家安全維持法（国安法）を施行したこととて、一国二制度は確実に崩壊しつつある。2047年まで中国本土とは異なる民主的な統治システムを維持する約束を中国政府と交わした旧統治国の英国は怒っている。

英政府は、英国海外市民パスポート（BNO）所持者300万人を受け入れる用意があると表明し、中国政府は強く反発。しかし、実際には現在、BNO所持者は全香港市民中35万人しかない。英国政府の見解は、約300万人がBNO申請条件を満たしているとしている。

BNOパスポートは1997年の香港返還以前に生まれた香港市民に与えられたもので、本来は在香港英国領事館の一定の支援が受けられる権利付きの渡航許可証だ。当時は香港市民も一国二制度が保証されると思えば申請しなかった市民も多く、実際、同パスポート所持者でも一度も英国に旅行したことない香港人もいる。

今回の英政府の方針では、BNO

パスポート保持者はイギリスで5年間生活し働くことができれば市民権獲得の申請ができ、もう1年とどまれば永住権を得られるようだ。昨午までの香港人の中国本土を除く移住先国はアメリカ、カナダ、英国、オーストラリアの順だが、今はオーストラリア、カナダが急上昇中だ。

アメリカの人気落ちたのは、トランプ政権になって移民政策が厳しくなり、同時に移民排斥や人種対立の高まりで世界一安全と安心、富裕層には最も豊かな暮らしを提供する国とは見られなくなったことが挙げられる。ニューヨークに移住した友人の香港人は、半年も経たない内にアンチ・トランプになった。

1997年以前に海外脱出した先はカナダの人数が高かった。アメリカほど弱肉強食でなく、特に西海岸のバンクーバーなどは東洋人移民が多く、香港人には差別の少ない住みやすい国だった。今回、英国が香港人受入れに手を挙げているが、英国という選択肢はカナダ、オーストラリアより低いといわれている。

過去のことはいいえ、19世紀の大英帝国時代、紅茶を求めて中国に進

出した英国は大量の茶、陶磁器、絹を清から輸入した。しかし、英国から清への輸出品は限られ、銀の流出を制限していた英国は輸入品への支払いに窮し、インドで栽培していたアヘンを清に密輸し、貿易赤字を埋め合わせていた。

このことに反発して起きた清と英国のアヘン戦争は英国が勝利し、香港を割譲地として手にした。その後のフランスも加わっての第2次アヘン戦争で割譲地の大きさは変わったものの、英国は1997年まで統治を続け、アジアの金融とビジネスの拠点として栄え、今に至っている。

数年前、香港上海銀行にルーツを持つ英大手銀行HSBCで研修を行ったことがある。同行は19世紀、ヨーロッパ、インド、中国間で拡大する取引の資金調達を支援する目的で1865年に創設された。第1次、第2次アヘン戦争後の英国のアジア支配に欠かせないHSBCは、グローバル金融機関の先駆けでもあった。

しかし、統治されてきた香港人が大英帝国支配を喜んでいただけではない。アヘンと戦争がきっかけと



帝国主義の爪痕の処理

なつた統治は深い傷を残した。確かに英国がもたらした自由と民主主義、人権重視は恩恵だったが、過去の統治の歴史は屈辱的だ。古い世代には白人がわが物顔で町を歩く姿が記憶に焼きついている。

ロンドンに住む中国人に聞いても、フランスやドイツ、スウェーデンに住む中国人の友人に聞いても、欧州の中国人差別は非常に厳しいものがある。香港から移住し中華料理店を営む陳さんは、けつして多文化共生主義のカナダやオーストラリアほどに英国は移民に開かれているとはいえないという。ヨーロッパの白

人中心主義は今も存在する。

特に最近では東洋人を見ると「中国ウイルス」と差別する空気が強まっているので、英国に逃げてきても定着するのは容易ではない。そんな情報では脱出を考える香港市民には知れ渡っており、英国脱出の規模がどこまで大きくなるかは、むしろ英国の問題といえそう。

英BBCテレビは、フレグジットとコロナで深刻な経済危機にある英国が300万人もの香港人を受け入れる受け皿があるとは到底思えないと指摘する。あるいは手を挙げても大した人数は来ないだろうと英政府は最初から踏んでいるのだろうか。

米国の黒人男性ジョージ・フロイドさんが警察官によって拘束中に殺害された事件をきっかけに、世界中で警察の人種的マイノリティーへの暴力に対する抗議運動が広がっている。

英国では7月7日、港町プリストルで17世紀の奴隷商人エドワード・コルストンの銅像

が「ブラック・ライブズ・マター（黒人の命は大切）」のデモ隊によって引き倒され、川に投げ捨てられた。英国内では英雄記念碑が標的にされる事件が相次ぎ、ロンドンでも議事堂前に立つチャーチル元首相の像さえも落書きされた。

ベルギーでは、今回のことで国王レオポルド2世の銅像がデモ隊によって燃やされ、赤いペンキが塗られた。レオポルド2世は1800年代終盤に私領地として保有していたコンゴで数百万人を殺害したとされる人物。無論、銅像の台座にはその事実も記録されているが、おぞましい歴史だ。

往々にして、その国の英雄は他国にとつてはとんでもない人物の場合が多い。南米チリの南端プンタ・アレナスにはマゼラン海峡を発見したマゼランの威風堂々とした銅像の像もある。彼らは奴隷商人によって売り買ひされた。

支配する側から見た英雄は支配される側からみれば、恩讐でしかないのが歴史だ。今は人種が交じり合っている、経済優先で過去に何事もなかつ

たような雰囲気だが、実は帝国主義時代に奴隷貿易の過去を持つ欧州諸国は、その歴史に向き合ったことはない。

私は20年前、フランスの大学で教鞭を取り始めた頃、フランス人学生に帝国主義時代について質問したら、「そんな話は学校でも家庭でも出たことはない」といわれ、驚いたことがある。

帝国主義時代には西洋文明の優位性を誇り、原住民を奴隷にするのは当然とされた。チャーチルも中国人、日本人、インド人、アフリカ人を蔑視していたという。

異文化理解では、その国の町に立つ銅像を調べることで、その国の国民の価値観を知る手がかりになるという。しかし、その銅像は永遠に立つていることはできないかもしれない。

中国政府は、一国二制度を強引に終わらせる国安法で香港人の心を深く傷つけたことは間違いない。ネクストコロナに向かい、20世紀の2つの大戦で封じられた欧州帝国主義の横暴は今後、果して清算されるのだろうか。